

Title	恵心僧都源信の伊勢参籠：中世唱導説話を中心として
Sub Title	A case study of medieval preaching narratives : Eshin sōzu Genshin's pilgrimage to Ise
Author	伊藤, 文一(Ito, Bunichi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2025
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.129, (2025. 12) ,p.1 (202)- 16 (187)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01290001-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

恵心僧都源信の伊勢参籠——中世唱導説話を中心として——

伊藤 文一

はじめに

平安中期の天台僧である恵心僧都源信（九四二—一〇一七）は、早くからその著作である『往生要集』・『二乗要決』・『横川法語』などが受容され、天台宗恵心流の祖や浄土教を広めた碩学の僧として説話にもたびたび登場する。特に中世以降は源信と母との説話が多く記され、源信伝研究においても先学による分析が蓄積されてきた。

中世から近世に至るまでの源信伝を総括的に扱った研究は、管見の限りにおいて少ない。本論文では伊勢参籠の記事を軸に、従来説であまり検討されてこなかった『恵心先徳夢想之記』などの典籍にも注目し、中世以降の源信伝の書承関係を再整理する。それを踏まえ、源信の伊勢参籠説話の享受圏を明確化することを目的とする。

一、源信伝の整理

大塚あや子¹は、源信の「聖」・「名僧」としての描写の諸相を検討した。浅田正博²は、『恵心僧都物語』を中心とした物語

的描述を検討したうえで、源信の一生や事績を伝記の形で記述する「生涯話」と、独立した一つの話として描かれる「単独話」に大別した。また、渡邊守順は従来、天台浄土教の中で捉えられてきた「源信」像の再検討を行った。これらの総括的な源信伝研究を踏まえ、主要な伝記として以下のものが挙げられる。

- ①『首楞嚴院二十五三昧結縁過去帳』『前権少僧都源信』、②『大日本国法華経験記』下巻第八十三「楞嚴院源信僧都」、③『延暦寺首楞嚴院源信僧都伝』（別伝）、④『続本朝往生伝』第九、⑤『今昔物語集』卷十二「横川源信僧都語第三十二」、⑥『私聚百因縁集』卷八第四「恵心ノ事」、⑦『元亨釈書』卷四「慧解二之三」、⑧『三国伝記』卷十二第三「恵心院源信僧都事」、⑨『恵心僧都物語』（恵心僧都之御物語双紙、恵心僧都御房形状記）、⑩『恵心院源信僧都行実』、⑪『恵心僧都絵詞伝』、⑫『恵心僧都行状記』、⑬『直談因縁集』卷八第十四、⑭『浄土真宗七高祖伝』『源信僧都伝』、⑮『三国七高僧伝図会』卷三「源信僧都伝」

源信の伝記の最古例は、寛和二年（九八六）成立の念仏結社、二十五三昧会で編まれた過去帳である、『首楞嚴院二十五三昧結縁過去帳』⁴（以下、『過去帳』）であり、以降はこの内容が継承される。源信の事績を細緻に記した伝記が成立した一方で、早くからその事績を外れた説話も散見され、源信の説話利用が積極的に行われていたことがわかる。『法華験記』上巻第三十九「叡山円久法師」⁵には、以下のようにある。

最後の時に臨み、手に経巻を執りて、口に妙法を誦し、西方に向ひて坐し、更に余の言なし。その死屍を斂めて、幽谷の中に置けり。数日を経ずして、その墓所の方に、法華を誦する声あり。その音甚だ貴くして、存生の音に似たり。連夜の誦経、更に休息せず。四十九日の法事の已後、その声聞えず。中有の生を替へて、浄土に往生するがごとし。

叡山僧円久が道心を起こし、愛宕山の南星という地に籠居して、法華経の誦経を経て往生に至るといふ往生譚である。また、同話にあたる『今昔物語集』卷十二「天台円久於葛木山聞仙人誦経第三十八」には以下のような説話がみえる。

偏へニ經ノ威力ヲ憑テ、音ヲ拳テ誦誦ス。既ニ曉ニ成ヌラムト思フ程ニ、此ノ木ノ末ニ居ルト見ツル者、細ク幽ナル音ニテ極テ貴ク、「是人之功德 無辺無有窮 如十方虚空 不可得辺際」ト誦シテ立テ飛ビ去ヌ。(中略) 返テ後、横川ノ源信僧都ニ此事ヲ語ケレバ、僧都此レヲ聞テ泣々ク貴ビ哀ビ給ヒケリ。円久遂ニ命終ル時、彼ノ南星ノ峰ニシテ法花經ヲ誦シテ貴クテ失ニケリトナム語り伝ヘタルトヤ。

葛木山に籠居し、偈を唱えながら飛び去る何かを円久が目撃すると付加され、その後、「横川の源信僧都」にこのことを語るといふ一文が添えられている。また、前掲した一覽の伝記の他にも、源信が金峯山の巫女に歌占を頼む説話(『十訓抄』第六ノ三十七)や、仏画・仏像作者に源信を仮託する記事(『実隆公記』永正六年九月十五日条)などを含め、源信が事績に拠らず幅広く説話に利用され、重要視されていたことがうかがえる。中でも、きわめて多くの源信伝に引かれ注目されるのが、源信とその母の説話である。

二、源信と母の説話の特徴

源信の母に関する記述は、『過去帳』に古例がみえる。

自来^ニ於此^ニ出家受戒。住山修学、学業既成、為^ニ仏道英雄^一、論議決擇、世称^ニ絶倫^一。時赴^ニ公請^一。有^ニ所得物^一。撰^ニ貴贈^レ母。母泣報云、所^レ送之物。雖^レ非^レ不^レ喜、遁世修道、我所^レ願也。即隨^ニ母言^一永絶^ニ萬縁^一、隱^ニ居山谷^一、修^ニ淨土業^一。長和二年正月一日、所^レ著願文云、生前所^レ修行法、今略録^レ之。念仏二十俱胝遍、奉誦大藏經、五萬五千五百卷。法花八千卷阿彌陀經一萬卷般若經三千餘卷等也。奉^レ念大呪百萬反。千手呪七十萬反。尊勝呪三十萬反。并弥陀、不動、光明、仏眼等呪少少也、云云。其後所作、亦有^ニ別記^一、此外又有^ニ一卷十餘紙書記^一。一生所^レ作善根、其中或造^ニ仏像^一。或書^ニ經卷^一或行^ニ布施^一、或助^ニ他善^一。如此大小事理、種種功德、不^レ能^ニ具記^一。又念仏餘暇。所^レ撰法門。有^ニ数部数十卷^一、往生要集三卷、一乘要決三卷、大乘対俱舍抄十四卷、回明四相違疏注釈三卷、同義断纂要注釈一卷等也。

横川で修学に励み、仏道の英雄となった源信は母に贈り物をするも、母から「(源信が)遁世し仏道に励むことが自分の望

む所である」と論される。母の言に従い山谷に隠居し、浄土教の修行に専念する。『延暦寺首楞嚴院源信僧都伝』にも同内容が記され、早くから源信伝で重要視されたことがわかる。

源信と母のやり取りから『往生要集』撰述に至るまでの記述は、『法華驗記』下巻第八十三話を踏襲し源信の事績を述べる、『今昔物語集』巻十二「横川源信僧都語第三十二」⁷にみえる。『過去帳』の前掲部分について、以下のようにある。

前ノ一条ノ院ノ天皇、「源信止事無キ者也」ト聞食テ、召出デ、公家ニ仕フル間、僧都ニ被成ヌ。然レドモ、道心深キガ故ニ偏ニ名聞ヲ離レテ、官職ヲ辞シテ遂ニ横川ニ籠居ヌ。其ノ後、静ニ法花経ヲ誦シ念仏ヲ唱ヘテ、偏ニ後世菩提ヲ祈ル。一乗要決ト云フ文ヲ作テ、「一切衆生皆成仏」ノ心ヲ著シ、往生要集ト云フ作テ、往生極楽ヲ可願キ事ヲ教ヘタリ。其ノ時ニ、夢ノ中ニ観音来給テ、咲テ金蓮花ヲ授ケ給フ。毘沙門天蓋ヲ捧ゲテ傍ニ立給ヘリ、ト見ケリ。如此ク貴キ事多シ。

ここでは母の話に言及することなく、道心の深さを理由に横川へ籠居し、『往生要集』の著述に至っている。一方、巻十五「源信僧都母尼往生語第三十九」は源信伝から母の話のみを抄出している。源信の山籠について、以下のように記述されている。此ク山ニ籠テ六年ハ過ヌ。七年ト云フ年ノ春、母ノ許ニ云ヒ遣テ云ク、「六年ハ既ニ山籠ニテ過ヌルヲ、久ク不見奉ネバ、恋シクヤ思シ食ヌ。然バ白地ニ詣デム」ト。返事ニ云ク、「現ニ恋シク思ヒ聞ユレドモ、見聞エムニヤハ罪ハ減ビムズル。尚山籠ニテ御セムヲ聞カムノミゾ喜カルベキ。此レヨリ不申ザラム限リハ不可出給ズ」ト。僧都此レヲ見テ、「此ノ尼君ハ只人ニモ無キ人也ケリ。世ノ人ノ母ハ此ク云ヒテムヤ」ト思テ過ス程ニ、九年ニ成ヌ。

往生伝を集成した巻十五所収であり、前後話は尼僧の往生・母の往生が描かれる。加えて、『今昔物語集』所収の往生伝として典型的な話末評語である、「横川ノ聖人達モ此レヲ聞テ、哀也ケル祖子ノ契也、ト云テゾ泣々尊ビケル、トナム語り伝エタルトヤ」の言が添えられることから、往生譚の一つとして採録された話であると位置付けられる。本話において、源信の母の説話は、『過去帳』に比して内容が増補され、『今昔物語集』以降に成立した伝記においても採録され続ける。大塚あや子が指摘するように、中世以降の源信伝ではこの母の話に主眼が推移していくのである。仏伝における釈尊の母摩耶夫人の描写に端を発し、法然・空海・良源など、聖人の出生譚ではしばしば母の説話が詳述される。源信の母の説話も同様であ

り、『今昔物語集』以降大きく取り上げられ、鎌倉期以降に成立する源信伝にも定着を見せる。この母とのやり取りを経て菩提を祈る決心をした源信が伊勢神宮に参籠する旨の記述が、中世以降の一部の資料群にみえるのである。

三、源信の伊勢参籠説話の諸相

中世の源信説話における伊勢参籠の古例は、『三国伝記』片仮名本にみえる。卷十二第三「恵心院源信僧都事」は、以下の説話を所収する。

其後、僧都ハ一心ニ思切リ、双親ノ菩提ヲ祈ント思召テ、師匠ニ暇ヲ申テ、十二年間籠居シテ、九夏三伏ノ天ニモ白雲ヲ凌峯ノ花ヲ摘、玄冬素雪ノ地ニモ寒凍ヲ叩谷ノ水ヲ汲。止観鑽仰ノ窓ノ内ニハ三千一念ノ月ヲ澄シ、無相般若ノ床ノ上ニハ一乘実相ノ霜寒シ。一切経七千卷披閱シ玉コト五ケ度也。角テ十二年ノ後、先ツ伊勢太神宮ニ参、七日籠リ、後世菩提ヲ祈申サレケルニ、満散ノ夜ノ夢ニ、神殿ノ御戸ヲ開、貴女一人出マシマシテ、末代ノ衆生出離ノ要道ヲ尋ル事有バ、阿弥陀仏ヲ念ゼヨト勸ベキ由ヲ示シ給フ。此神勅ニ依テ、一切経ノ中ヨリ往生要集ヲ撰集シテ三卷トシ、諸人ノ往生ヲ勸メ玉フ。

また、片仮名本に比して成立年代がやや下ると考えられる平仮名本でも、伊勢神宮参籠から『往生要集』撰述に至るまで片仮名本と記述が一致する箇所が認められる。平仮名本卷十五第三話「恵心院そうつ源信の事」¹⁰では、以下のようにある。

そうつは、は、のの給ひしこときもにめいして、たつとくおもはれしかは、寛弘元年五月廿四日、権大そうつをちして、しよえんをやめ、よ川にこもり居給へり。しゆするところのせんこん、ねん仏十二くていへん、てんとく大せう経五万千百卷、あみたの大しゆ百万反、そんなうたらに三千万反、千手たらに七十万反、凡、一さいきやうをひらきみ給事、五反也と云々。ある時、いせ大神宮にまいりて、こせほたいをいのり給ひけるに、すなはち、夢の御つけに、末代のしゆしやうしゆつりのやうたう、あみた仏をねんすへしと、すゝむへきよしめし給。この御しんたくによつて、一さいきやうの中より、わうしやう浄土のようもんをえらひいたして、三卷の抄となし給。これを往生ようしうと号す。

片仮名本所収話のうち源信の名は、卷一第十二「源信僧都母事」・卷十二第三「恵心院源信僧都事」にみえる。平仮名本

は卷一を中心に説話配列の異同が認められるため前者が省かれており、卷十五第三話「恵心院そうつ源信の事」のみ。片仮名本では十二巻全体で三六〇話を数えた説話は、全巻が現存する黒田彰藏写本を参照すると、十五巻全体で三〇三話まで数を減らしている。特に、平仮名本では卷二・十・十五において、片仮名本所収の説話が省かれることが多く、「恵心院源信僧都事」を所収する卷十二もこれに相当する¹¹⁾。

一定期間の参籠を経た源信が、夢の中で貴女から告示を受け、それを受けて『往生要集』の撰述に至るとする話型は、片仮名本と平仮名本に共通する。また、母の菩提を籠居の動機とする点、参籠の期間を七日間とした点、夢告の内容に「末代の衆生出離の要道」という共通の文言を含む点は、後掲する『恵心先徳夢想之記』とは相違する一方で、近世の伝記との関連が認められる。成立が先行する片仮名本所収の源信説話二つのうち、平仮名本では伊勢の記述を持つ源信伝のみ採録していることに加え、伊勢の記事が省かれていないことから、源信伝に伊勢参籠説話が関連付けられて受容されたことがうかがえる。

天正十三年（一五八五）の書写奥書を持つ天台聖教典籍である『直談因縁集』にも同様に、源信の伊勢参籠説話がみられる。本書は、法華經の教理を平易に説くことを目的とした直談物にあたる資料である。卷二第十一（譬喩品）、第三十九（譬喩品）、卷五第二十三（安樂行品）、第二十七（安樂行品）、卷八第十四（普門品）と、計五例の源信説話が収録される。うち、卷八第十四話に源信伝と伊勢参籠の記事が含まれる¹²⁾。

一、付^テ求^ニ男^ト云^一。（中略）此布施^ヲ、其任^ノ、母^ノ所^ヘ送^リ、天子^{ニモ}知^レ奉^ト、母^モ聞[、]喜^ハン、ト云^テ、文^ヲ書^キ、使遣^玉フ也。時、母、此文見^テ、法門^{ヲモ}、帝王^ノ御耳^ニ入^ル様^{ニハ}、定^テ不可^一云^一、惣^{シテ}多武峰^ノ僧伽聖人^ノ如^{シテ}コソ、菩提^{ヲモ}可^ケレ問^一。内裏^{ナトヘ}参[、]臣下等^ニ被尊敬^セ、尚名聞利養也。争^カ施物^ヲ吾取^ン、ト云^テ、追返也。時、僧都、道理也^ト思召[、]十三^{年ノ}年^{ヨリ}籠山^{シテ}、一切経^ヲ六度迄被覧有^ル也。三十二年ノ年歟、伊勢太神^ヘ参詣有^テ、我学文^ノ間、無隙^一任[、]不参^一。今ハ隙明候間、参詣仕[、]ト云^云。時、天照太神^ノ告^{ニハ}、末世^ノ聖人、御身^ニ不可^一過^一。同^ハ、末代^ハ人機根未練^{ナレハ}、念仏^ヲ弘^玉マヘ、

ト云。去程ニ帰テ、往生要集ヲ作レリ。是ニハ遠離穢土、欣求浄土ノ相ヲ宣^玉ヘリ。(中略)サテ恵心^ハ、七十六^ノ年、六月十日ニ往生^シ玉ヘリ。臨終ノ砌^ニハ、弟子様数多集^テ悲歎ス。而、余^ノ弟子ヲ押ノケテ、慶祐一人留^テ、都率天^ニ生^{セン}、ト云。時、二童子来^ル。サレハ、西方浄土ヲ望^玉歟、ト云テ返ス也。一人童子ハ、持^ニ蓮花^ヲ来^レリ。妙音来相ノ蓮花也^云。

本話は、『法華経』「観世音菩薩普門品第二五」¹³にみえる、「若有女人設欲求男」の語を註釈する形をとる。女性が男児を望むにあたり、観世音菩薩への供養・礼拝を経て、「福德智慧之男」が生まれるであろうという内容を、源信伝と結びつけて抄録している。福德・智慧を備えた男として源信を挙げ、本話全体がその伝記に終始する。出生から叡山で良源に師事し、母の臨終を看取るまでが詳述される点は、中世以後の源信伝と共通し、話末に源信自身の往生の様子が付される。他書と同じく、母の言を受けて伊勢を訪ね、往生要集の撰述に至る。貴女や夢告といったモチーフはなく、ここでは天照大神が直接神託を授けている。

『三国伝記』と『直談因縁集』に多く見られる同話は、各々の編纂意識に基づき、本文を異にすることは阿部泰郎¹⁴により夙に指摘されている。他書と細部の記述を異にしながらも、伊勢参籠の記述は省かれておらず、本書は『三国伝記』と同様に、源信伝と伊勢参籠を関連付けて受容されたといえる。加えて、天台系の法華経談義の場において、源信の伊勢参籠説話を利用されていたことがわかる。

成立が『三国伝記』より遡りうる典籍として、『一言芳談』を挙げることができる。ここでも、源信伝と伊勢参籠の結節がうかがえる。以下は、慶安元年刊本所収の該当話全文である。

有云、恵心僧都、伊勢太神宮へまいりて七ヶ日参籠はつる夜の夢に、宝殿の御戸たちまちにひらけて、ゆゝしけなる、貴女一人いてたまへり。示云太神宮は本覚の都へかへりおはします。これは御留守に待るものなり。末代の衆生出離の要道をたつぬる事あらば弥陀仏を念ぜよとす、むべきよしおほせをかれ侍る。

伊勢に参った源信が、七日間の参籠の果てに貴女から夢告を受ける。夢告の内容は『三国伝記』に近しい。他書において参

籠の契機とされた母との話や、『往生要集』撰述に関する話が見えず、伊勢参籠の記事のみを採録している。本書において示されるように、伊勢参籠説話は、源信伝の中から抽出され、単独の説話として成立しうるほど重要視されたことがわかる。貞享五年（一六八八）刊の注釈書である『一言芳談句解』¹⁶は、以下の注釈を付す。

恵心僧都の事は、つまびらかに、元亨釈書に見えたり。此一段まづ、日本は神国なる故に、伊勢の事あるをちなみて、かき出せり。唯一の神道、両部の神道、両説有。まづ両部の神道とは、行基のはじまたまひ、弘法にいたり、本地とて、仏をたてたるなり。唯一の神道。伊勢、春日、三輪説まち／＼なれ共、心はひとつにして、本地のほとけをとらず。（中略）本文の心は、両部神道の心にて、弥陀をねんぜよといふことばをもつて、第一段にかき出せるか。されは神と云は、まことの心をさして云なれば、一心にみだをたのみ奉らば、いのらずとも神の心になふべし。こゝろはひとつなればなり。

『元亨釈書』所収の源信伝を踏襲したうえで、神道説に従って伊勢参籠の内容を付加したとある。ただし、『元亨釈書』所収の源信伝では、該当部分において伊勢にまつわる記述はみられない。¹⁷少なくとも本書が刊行された近世前期の段階では、源信の伝記における伊勢の記述に関して、『一言芳談』以外の明確な典拠を示せなかったといえる。ただし、『一言芳談』所収の該当該が古態を示した形であるか、断定できない点に留意すべきである。本書は『徒然草』第九十八段¹⁸に引用されており、少なくとも成立はこれに先行するため、十三世紀から十四世紀ごろの成立と考えられる。伝本は慶安元（一六四八）年刊本・『続群書類従』所収版本の二種であり、近世以降の版本に限られる。原態を参照できないため、源信伝を冒頭話に採録する『一言芳談』が『三国伝記』に先行すると断ずることは困難である。

『三国伝記』と成立年代が近接する典籍として、慶應義塾大学附属研究所斯道文庫蔵『恵心先徳夢想之記』一帖が挙げられる。本書は他に伝本のない孤本である。稿者の調査によれば、書面は両面書十枚で縦二二・九糎、横一五・〇糎の四つ半本で、小ぶりの説草の体を成す小冊子である。原装黒色無地表紙の左肩に打付墨書「恵心先徳夢想之記」と外題を付す。料

紙は斐紙、装訂は粘葉装であり、一頁あたり五行、一行十七字程度の総ルビ漢字片仮名交じり文で記述される。本文末尾に付された書写奥書には「于時康正三年丁丑中夏廿二書写之畢」とあり、本文の成立は康正三年（一四五七）を遡る。表紙左辺に押八双が確認され、書面には雲母引と押界が施される点は瞠目すべきであろう。この点から、テキスト内容の長期的な保存を志向して編まれた上製の小冊子と考えられる。以下、本文を私に翻刻した。

日本我朝^{ニホンワカテウ}二、恵心^{エシ}ノ僧都^{ソウツ}ト申テ、顕密兼学^{ケンミツケンガク}ノ聖人^{セイニン}、久修練行^{クシュレンギョウ}ノ先德御坐^{センタクマシマシ}キ。（中略）抑^{ソモク}、日本我朝^{ニホンワカテウ}ハ神国也^{シンコクナリ}、天照太神^{アマテラス}ニマイリテ、コノ一大事^{タイシ}ヲ、祈念^{キネン}セント、オホシメスアヒタ、俄^{ニワカ}ニ、ラクヤウノフモトヲタチキテ、三七日ノ参籠^{サンロウ}ヲイタシテ、身命^{シメノミコト}ヲステ、御祈念^{ミコネン}アリトキヘトモ、初七日^{ショウニチ}ニ感応^{カンオウ}ナシ、第七日^{タイニチ}ニソノシルシナシ、三七日ヨリハシメテ、五穀^{ゴコク}ヲタチ、一心^{シン}ニ祈念^{キネン}マウスル、トコロニ、結願^{ケツガン}ノ夜五更^{ヨカウ}ニオヨンテ、類正殿^{ルイセイテン}ノ御戸^{ミト}ヲヒラキ、夢^{ユメ}ニモアラ、ウツ、ニモアラス、唐装束^{カラシヤウフク}ノ女房^{ニヨウハウ}一人、ミナ水精^{スイセイ}ノ念珠^{ネンシュ}ヲモチテ、アユヒキテマシマスコトノ、儀式^{シキ}ヲ見^ミニ、カンルキヲサヘカタク、信心^{シンシン}、肝^{キモ}ニ銘^{メイ}ス。カノ女房^{ニヨウハウ}、精進^{セイジン}ノ聖人^{セイニン}ノ前^{マエ}ニ、ヤウカウシ、紅^{クレナイ}ノ涙^{ナミダ}ヲナカシテ、語^{カタリ}示^{シメ}ス。

顕密を修める源信は、昼は天台三大部である『摩訶止観』・『法華玄義』を修学し、開三願一の教を講義して、夜は一心三観の観想を行うという生活を送っていた。しかし、末法の世にあつては優れた知識を持つ人はいなかった。ある時、「日本我朝ハ神国也」として、天照大神の祀られる伊勢神宮へ参詣し、三七日の籠居を経て唐装束の女房が夢中に現れ、天照大神の言を伝える。神使が纏う唐装束は、『古事談』卷三「淨藏飛鉢天童取之事」¹⁹において天童が身に付ける例、『法然上人伝記』卷二上「俊乗房大勧進事」²⁰において、伊勢神宮に参籠した重源に夢中で玉を授ける貴女が身に付ける例がある。以下は、『法然上人伝記』の該当部分である。

重源は伊勢大神宮にまいりて、この願成就すべくば、其瑞相をしめし給へと祈請しけるに、三七日にあたりける五更の天に、唐装束したる貴女の、御手より方寸の玉をたまわると、示現をかうぶりて

伊勢参籠において夢中に貴女が示現するという、本話と共通する話型を組み込んでいる点が重要である。卷一序には「愚成

者のさとりやすからむため、見聞んものの信をすすめんために、数軸の画図にあらはし、萬代の明鑒にそなふ。念仏の行者として誰人か信受せざらむ」とあり、『恵心先徳夢想之記』と同じく、浄土門への帰依を促す典籍としての編纂意識が看取される。「唐装束」の貴女が示現する話が、浄土宗系の典籍において、伊勢神宮を描写する上で一種の典型であつた可能性が疑われる。また、女房が流す「紅の涙」は『孝養集』中巻に例がみえる。嘆きの形容として当時通用された表現であつたと考えられよう。

夢中で女房とまみえた源信は夢告を賜り、『往生要集』撰述に至る。

仏法万ニシテ修行マチノナリトイヘトモ、聖道ノ浄土ノ二門ニハキテス。シカルニ世ハ末代ニイタリ、人ハ十惡ヲ行ス。サレハ、聖道門ノ修行ハ名ノミアリテ、マコトナシ。タ、浄土ノ一門ニヨリテ、一行三昧ヲ修シ、弥陀ノ本願ニ乗シテ西方往生ヲトケ、弥陀ヲモテ知識トタノミ、今生ノ一大事ヲアキラムヘシ、是末代相應ノ法ナリ也。タ、シ、浄土門ノ修行ニヲキテ、マタ二門アリ。定善ノ修行ハ三昧発得ノ機ニカウフラシム、觀經ノ十三定善コレナリ。散善ノ修行ハ、愚惡ノ凡夫ニ、カウフラシム、末代相應之法ナリ。カルカユヘニ定善ヲステ、散善ヲ修シ、散善ノ中ニモ三輩九品ノ差別アリ。上品上生ハ誦誦大乘、解第一義ノ大乘修行ノ人ナリ、中品ハ一日一夜、出家受戒、孝養父母等ノ世善ナリ。下三品ハ念仏往生ノ機ナリ。シカレハ、散善ノ中ニモ誦誦持戒ヲシ、散善ヲステ、念仏ノ一行ヲ取ヘシ。名号ハ五劫思惟ノ本願、諸仏超世ノ悲願ナリ、定善ナリ、散善ナリ、難思法性ナリ、觀經ニモアラス、密教ニモアラス、甚深不可思議ノ名号ナリ。コ、ヲモテ釈尊、阿弥陀經ヲトキタマヒシトキ、フカイシヨウセンコトトク、一切ノ万善ヲハ、往生ノ因ニアラストキラキステ、念仏ノ一行ヲハ大善根、多福德ノ因縁トホメテ、往生ノ正因ト説タマキシ時、六方恒沙ノ諸仏、舌相ライタシテ眞実ナリト、証誠シタマフ。コ、ヲモテ称名ノ一行ヲ修シテ、万善万行ヲ円満シ、一向専修ノ行人トナリテ、順次ノ往生ヲトクヘシ。コレ、マツタイ相應ノ法ナリ（中略）聖人モ、スミソメノソテヲ、シホリタマヒテ、カサネテ本山ニヨチノホリテ、三千人ノ衆徒ニ、イトマコヒテ、一代ノ聖教ヲヒラキテ、念仏ノ要文ヲ集ム、今ノ往生要集、コレナリ。顕密ノ修行ヲサシオキテ、

修学^{シユカク}ノ二字ラステ、タ、ヒトヘニ愚^クニカヘリ、念仏^{ネンブツ}ノ一行ヲ修シテ西方^{サイハウ}ノ往生ヲネカイマシ^{ワウシヤウ}キ。

顕密を捨て、浄土門に帰依することを説く長大な夢告である。『三国伝記』、『直談因縁集』、『一言芳談』所収話と比較して、浄土門への帰依を促す文言に筆を費やす点に、浄土系の典籍としての形成と受容をうかがわせる。夢告を受け、聖教典籍の集成を経て『往生要集』撰述に至る内容は、『過去帳』以降の源信伝同様に含まれる。ここでは、一定期間(三七日)の伊勢神宮参籠の果て、天照大神の言を伝える唐装束の女房により夢告を受ける。念仏を促す文言を伝え聞き、それを受けた源信が『往生要集』を撰述する旨を以て、一書とする点は重要である。

本書について黒田彰²²は『三国伝記』との関連を指摘し、本書を「当時流布した源信伝の一環と知られる」とする。さらに山田雅教²³は、先行する『一言芳談』、近世に成立する『恵心院源信僧都行実』を挙げ、「源信の伊勢参宮の伝承は中世においてはあまり一般的でなかったらし」と指摘している。また、本書と『直談因縁集』の連関については近本謙介²⁴が触れており、『往因類聚抄』と『直談因縁集』の影響関係のように、談義所で流布した草子の内容を取り込む例が他にも確認される。²⁵ 本書は、参籠の動機を母の話と関わらせず、「抑、日本我朝ハ神国也」とし、「唐装束ノ女房」や「紅ノ涙ヲナカシ」などの文飾を施すなど、伊勢参詣を強調している。上製の小冊子であることに鑑みても、本書の内容の権威付けを志向したことによると推測される。

四、近世の源信伊勢参籠説話

近世以降に編纂された源信伝においても伊勢参籠の記事がみられる。『恵心院源信僧都行実』²⁶は、跋によれば享保三年(一七一八)に和泉国の僧である白道恕哲が制作したとある。後掲する『恵心僧都絵詞伝』にも引用されているところを見ると、江戸時代中後期を通じてある程度披覧されていたようである。本書も、伊勢に関する記述を含んでいる。

又詣^{シテ}伊勢ノ神祠^ニ、期^ニ七日^ニ析^ニ出離ノ通津^ニ、満散^ニ夜夢^ニ、一貴婦人儀貌端正、排^ニ殿戸^ニ從容^{トシテ}告曰、有^下人間^ニ出要^上一者^上、乃語^{ケヨ}之唯念^{セヨト}阿弥陀仏^ニ、覺^{メテ}而拳拳^{トシテ}服膺^{トシテ}、自^レ是而後、自行化他、專^ス称名^ニ也、永観二年冬

十一月、搜^二羅^一經論、拈^二遮^一章記、著^二往生要集三卷^一、以備^二西邁之勸発^一也

「満散の夜」という時間設定や、「阿弥陀仏を念ぜよ」という夢告の内容は、先んじて『三国伝記』にみられるものと合致しており、本書はこれに拠つたと推察できる。宝暦十四年（一七六四）の跋をもつ『浄土真宗七高祖伝』²⁷にも同様のことがいえる。

某年詣^二伊勢神祠^一。期^二七日^一祈^レ示^二出要^一。散夜夢、一貴女、容貌偉麗、啓^二殿戸^一出、告曰、末世要法、無^レ如^レ念^二弥陀^一。

江戸時代末期に編纂された『恵心僧都絵詞伝』²⁸上巻所収の源信伝にも、同様の説話および『三国伝記』を踏襲した表現がみとれる。

僧都ある時天照大神宮へ一七日参籠して、菩提心をいのり末代の要行をうかゝひ給ふに、七日満ずる夜の夢に、神殿の御戸をひらき貴女一人いで給ひて、末代の衆生出離の要道をもとむる者あらば阿弥陀仏を一心に念ぜよと勸むべし。（中略）末代時機相応の法は、念仏の一門にすぎたる事なきの旨、ふかく心にそみければ、往生要集をゑらびてあまねく諸人に往生極楽をすゝめ給ふといふ。

中巻冒頭には、

往生要集は大神宮の専念弥陀をすゝめよと示し給ふ神託により、阿弥陀聖の²⁹龍厭離穢土の行相をしめし給ふによりて、撰述し給ふ所なれば、仏意にかなひ神慮にかなふの要門なる事は、誰かこれを間然すべき。

とあり、『往生要集』撰述の權威性を保証する存在として伊勢神宮の名を挙げている。また、本書の下巻卷末では、纂集した典籍を以下のように列挙している。

拙き筆をとりて發起師の厚志にむくゆ。其纂集する所は、首楞嚴院二十五三昧過去帳・慈恵大師伝・続往生伝・山家雜詮・法華驗記・大鏡・正法眼藏隨聞記・長明発心集・康頼宝物集・清輔袋草子・西行法師撰集抄・往生要集記・元亨釈書・述懷鈔・明匠略伝・十訓抄・砂石集・叡岳要記・百因緣集・三国伝記・一言芳談・法華経直談・和論語・地藏菩薩

靈驗記・同感応伝・觀経厭欣鈔・念仏無上法王義・西教寺記・來迎寺縁起・高野山通念集・本朝高僧伝・扶桑往生伝・叡山參詣案内記・僧都行実等によりて、略録し侍りて恩海の一滴に酬ゆ。

うち、伊勢參籠の記述を持つ典籍は『三国伝記』・『一言芳談』のみであり、表現がより近い『三国伝記』に直接拠った章段であると推察できる。

万延元年（一八六〇）刊本が伝わる『三国七高僧伝図会』卷三第三「謁^二空也^一源信問^二浄土往生^一」にも同様の傾向が看取されるが、『往生要集』の撰述については、後話である第四「源信遇^二母臨終^一并^二撰^一往生要集」にて別記される。

一年伊勢太神宮へ詣で給ひ、七日の間誓を立て、出離の要路をしめし給へと祈り給ふ。七日満ずる夜の夢に、美しき貴女神殿の扉をひらき出てつげ言ふやう、出離生死頓證菩提の爲には、末世の要法弥陀を念ずるに如はなしと。

近世以降の源信伝では、一定期間の參籠に關し、「滿散の夜」という時間設定を踏襲している。加えて、その多くにおいて「末世の衆生」・「出離の要道」に類する表現が共通しており、『三国伝記』所収話に依った記述を採録していると考えられる。近世中後期以降は真宗系の源信伝が編まれるようになるが、伊勢參籠説話は必ず組み込まれ続ける。源信伝や『往生要集』の權威性を補強する意図を以て、真宗においても本説話が重要視されていたことが指摘できる。

おわりに

中世以降、伊勢參籠説話は、各宗の間で流布した『恵心僧都物語』ほか、それ以前の源信伝にも殆ど例のない描写であった。この話型の書承について、二つの経路が想定される。

一方は、『一言芳談』・『三国伝記』を受けて成立した、『恵心院源信僧都行実』・『恵心僧都絵詞伝』・『浄土真宗七高祖伝』・『三国七高僧伝図会』など近世の源信伝である。もう一方は、『一言芳談』・『恵心先徳夢想之記』・『直談因縁集』に見られる、源信の伊勢參籠説話を独自に組み込んだ典籍群である。特に、天台・浄土双方の唱導の場において、源信の説話が活発に利用されていたといえる。源信の伊勢參籠説話は中世以後、天台系・浄土系の典籍や真宗系の典籍へと継承されており、

法会や談義といった唱導の場を通して、宗派を横断して受容されていたと考えられる。斯道文庫蔵『恵心先徳夢想之記』は、特に伊勢との結びつきを強調しつつ、浄土門への帰依を促す一書として製作された点は重要である。書物の形態だけでなく、その内容においても権威付けがなされたことが推測される。これは、源信伝の中でも『往生要集』の撰述が、談義の場でいかに重要視されてきたかの証左といえよう。実際に『往生要集』は、天台真盛宗の祖である真盛聖人（一四四三—九五）によって、室町期の宮中においても盛んに談義が行われていたことが知られており、その撰述に関わる説話が求められたのであろう。

各宗の間でなぜ、いかにして源信・『往生要集』と伊勢神宮が語られたのか、本論文ではその一端を明らかにした。ただし、伊勢参籠説話は、源信の説話利用における一形態である。他にも例えば、『往生要集』撰述後に宋で受容が進んだ」旨の記述には、源信伝の間でも異同が見られる。『直談因縁集』をはじめとした中世の唱導の場において、源信像や伊勢観がいかなる実態を以て利用され、享受されたのか。唱導説話や参詣記といった諸資料のさらなる分析を経て、これを明らかにすることを今後の展望としたい。

注

- 1 大塚あや子「源信話考―聖から名僧へ―」、『明海日本語』第一号、明海大学日本語学会、一九九五年
- 2 浅田正博「中世における源信の伝記と説話性―特に『恵心僧都物語』（または天然本）を中心として―」、『佛教學研究』第五十六号、龍谷大学仏教学会、二〇〇二年
- 3 渡邊守順「説話文学の恵心僧都」、『叡山学院研究紀要』十二号、叡山学院、一九八九年
- 4 『恵心僧都全集』所収。
- 5 『日本思想大系』所収。

- 6 『新日本古典文学大系』所収。
7 『新日本古典文学大系』所収。
8 前掲論文。
9 池上洵一校注『三国伝記』、三弥井書店、一九七六年
10 名古屋三国伝記研究会編『三国伝記平仮名本』、古典文庫、一九八二年
11 黒田彰編『黒田彰蔵平仮名本三国伝記』（幼学の会、二〇一六年）参照。平仮名本で補われているのは、巻十四第六「江口の君の事」のみ。『撰集抄』に同話が見える。
12 廣田哲通・阿部泰郎・田中貴子・小林直樹・近藤謙介編『研究叢書日光天海蔵直談因縁集―翻刻と索引』、和泉書院、一九九八年
13 観世音菩薩、有_レ如_レ是等大威神力、多_レ所_レ饒益。是故衆生常応_二心念_一。若有_二女人_一設欲_レ求_レ男、礼_三・拝供_二・養觀世音菩薩_一、便生_二福德智慧之男_一。設欲_レ求_レ女、便生_二端正有相之女、宿殖_二德本_一衆人愛敬_上。無_レ尽意。（『大正新脩大藏經』）
14 阿部泰郎「直談因縁集」解題、『研究叢書日光天海蔵直談因縁集―翻刻と索引』、前掲
15 国立国会図書館蔵慶安元年刊本、国立国会図書館デジタルコレクション、二〇二五年九月二十七日最終閲覧
16 多屋頼俊編『一言芳談―校註』、法蔵館、一九三八年
17 始思_二夢事_一。励精修学、天性聡明、究_二顯密教_一。五種法師、四種三昧。無_レ不_二練_一、過_二壯歲_一忌_二榮名_一。屏_二居横川_一。專以_二著述_一為_二己任_一、所謂一乗要訣、往生要集、阿弥陀経疏、大乘対俱舍抄、因明相違注釈等也。台嶺教法、此時為_レ盛。負_レ笈承_二業者多_一。時號_二慧心院僧都_一。信作_二台宗二十七疑_一。（中略）風舶来往、音問相繼。其一乗要訣者。顯_二衆生成仏之義_一、斥_二定性無性之執_一也。時夢、西天馬鳴龍樹摩頂讚歎。伝教大師合掌告曰。我山教法今属_レ汝焉。往生要集者。備_二西方之勸発_一也。（『国史大系』）
18 尊き聖の言ひをけることを書付けて、一言芳談とかや名付けたる章子を見侍りしに、心合ひて覚えしことども。（『新日本古典文学大系』）
19 老僧云はく、「いと不便なる事にこそ侍るなれ。一切知り侍らず。相ひ尋ぬべし」とて、微音に人を喚ぶ。閑所より出で來たる人を見れば、唐装束を着たる天童なり。僧云はく、「此く仰せらるる事は、汝がしわざか。いと不便の事なり。自今以後有るべからず」と諫むれば、童頗る緒面して退去し畢んぬ。（中略）天童、瑠璃のさらに、からの梨のむきたるを四果もりて、扇の上

に置きて持て来たりけるを、先ず一果服するに、天の甘露もかくやおぼえて、忽ちに身もすすしく、つかれも直りにけり。
 (『新日本古典文学大系』)

『浄土宗全書』所収。

十万如来大慈悲 皆集一体観世音西方称为阿弥陀 娑婆示現観世音八寒八熱那落迦 大悲一人代受苦^文

文の意は如来慈悲の余りに、紅蓮大紅蓮の底に入て、我等に替つて慈悲の肝をくだき、焦熱大焦熱の中に我等に替て忍辱のはだえをこがし給ふ。哀れなる哉。思もしらぬ我等が故に、青蓮のまなじりより紅の泪を流し給ふ。(『統浄土宗全書』)

黒田彰「三国伝記と恵心僧都物語―説草から説話集へ―」、『愛知県立大学説林』三十七号、愛知県立大学国文学会、一九八九年

山田雅教「親鸞の伊勢参宮伝承について」、『高田学報』七十六号、高田学会、一九八七年

近本謙介「『直談因縁集』の『三国伝記』受容」、『中世説話物語文芸の形成と展開』、学位論文、一九九六年

阿部泰郎、前掲論文。

『恵心僧都全集』所収。

『新編真宗全書 史伝編』所収。著者である玄智が明和二年(一七六五)に制作した注釈書である、『浄土真宗七祖伝衍釋篇』巻六「源信大師伝」には、源信の伊勢参籠について「又伊勢神祠 此縁出^{寛正四年}一言芳談^{作上}二云」(『新編真宗全書 史伝編』)とあり、この記事の典拠が「一言芳談」であるとしている。

『恵心僧都全集』所収。

龍谷大学図書館蔵万延元年刊本、龍谷大学図書館貴重資料画像データベース、二〇二五年九月二十七日最終閲覧